

企画展

# 近代日本を支えた 常滑の土管

とこなめ陶の森 資料館 特別展示室

2018年9月15日(土)-12月24日(月・祝)

〔特別講演会〕

近世から近代における土管の様相 - 常滑を中心に -

講師：小栗康寛（とこなめ陶の森学芸員）日時：12月15日（土）10：00～12：00 参加費：無料

とこなめ陶の森 資料館

〒479-0821 愛知県常滑市瀬木町4丁目203番地 TEL：0569-34-5290

開館時間：9:00～17:00 休館日：月曜日（祝日の場合翌日）



常滑の土管置場の風景『常滑陶器誌』より

流石に土管の町である。  
 至る処土管の製造と製造された土管とで埋もれている。  
 石垣も土管で築いてある。  
 庭の敷石も土管である。  
 表にも裏にも街にも濱にも見渡す限り土管である。

明治44年(1911)6月15日発行の『実業之日本』誌上で記者が常滑へ出張した時の感想をこのように述べています。

上の写真は明治44年の常滑の土管置場の風景です。常滑では戦後も見ることができた当たり前の風景でしたが、記者の驚いた気持ちが伝わってきます。この風景は平成に入って失われてしまいましたが、垂直に立ち並ぶ無数の煙突や無造作に積み上げられ並べられた大量の甕や土管が「常滑」という町の景観を作り上げてきたことが想像できます。そして常滑という町が産業であるやきものづくりによって人々の暮らしを変化させてきたことも証明しています。

本企画展では、現在の常滑をつくりあげる根底にあった土管に注目して、江戸時代から現代の土管を展示します。



近世土管(江戸時代後期)

近代土管(明治後半)



土管の木型(大正時代)



鯉江方寿翁家の陶製墓碑(明治18年)

## 時代

## 土管に関する出来事

7世紀	600年代	仏教の伝来とともに土管と瓦の技術が日本に伝わる。
文政 2年	1819	篆刻家山口墨山の礫石経塚の下部に常滑の土管が使用される。
文政 4年	1821	近代土管の父、鯉江方寿 <small>こいえほうじゅ</small> が生まれる。
天保年間	1831 ~1845	鯉江方寿 <small>こいえほうじゅ</small> ・方寿父子が常滑で登り窯を完成させる。
弘化 4年	1847	鯉江方寿が美濃高須藩上屋敷（新宿区荒木町）で上水用の土管を依頼をうける。
明治 5年	1872	神奈川県令から土管の注文を受ける。
明治 6年	1873	鯉江方寿が木型を開発し、土管を製造。横浜に納品する。
明治 7年	1874	鯉江方寿・高司父子が京阪鉄道敷設のための土管の注文を受ける。
明治 8年	1875	海軍省より土管の注文を受ける。
明治 11年	1878	清国の金士恒 <small>きんしこう</small> が常滑を訪れ、鯉江家の窯場を金島山窯 <small>きんとうざん</small> と名付ける。
明治 12年	1879	鯉江高司 <small>こうし</small> が陶弘社 <small>とうこうしゃ</small> を設立し、社長となる。東京に支店をつくる。
明治 15年	1882	長浜大垣間鉄道敷設のための土管の受注を受ける。 東京松井総兵衛の注文で、鯉江常之助 <small>つねのすけ</small> 、方寿 <small>たかし</small> 、高司の指導で半径土管の製造を開始する。
明治 16年	1883	関ヶ原大垣間鉄道敷設用の土管の注文を受ける。
明治 17年	1884	関東方面及び名古屋大垣間鉄道敷設用の土管の注文を受ける。 鯉江高司が陶弘社を脱退し、常産商会 <small>じょうさんしょうかい</small> を設立する。
明治 18年	1885	鯉江家、鉄道局への土管販売権を開放し、土管製造業者が乱立する。 鯉江高司、土管専売特許を出願する。 鯉江方寿、瀬木墓地移転にともない、鯉江家の陶製墓碑を建てる。 陶弘社の伊藤清吉が三河に碧海土管製造所を創設する。
明治 19年	1886	常産商会、官許を得て隆盛する。
明治 20年	1887	神奈川県秦野 <small>はたの</small> で常滑の土管を使って上水道が敷設される。
明治 23年	1890	鯉江家が第三回内国勸業博覧会に鉄道土管を出品する。 常滑の土管を使用した神奈川県秦野の上水道が完成する。
明治 29年	1896	山下豊蔵が平地窯を築き、土管気を使用した尾張土管株式会社を設立する。
明治 34年	1901	常滑で両面焚倒焰式角窯が築かれる。 マンガン釉、食塩釉の土管がつくられる。
明治 35年	1902	鯉江高司が台湾で窯を築き、土管生産を始める。 伊奈初之丞 <small>はつしじょう</small> 工場が土管の製造を始める。
明治 37年	1904	発動機によるプロペラ式土管機が使用される。
明治 38年	1905	伊奈初之丞が登り窯の燃料を薪と石炭の両焚き可能な折衷式の窯に改良する。
明治 41年	1908	蒸気機関による土管機が使用される。 名古屋市の下水道敷設事業が始まる。
明治 45年	1912	伊奈初之丞工場がロール式土管機を使用する。
大正 元年	1912	伊奈初之丞工場が土練機を創始する。常滑に電燈がとまる。
大正 2年	1913	伊奈初之丞が伊奈式土管機の特許をとる。
大正 10年	1921	土管生産額がはじめて年額 200 万円を超える。
大正 13年	1924	ヒューム管の登場により、鉄道土管を圧迫するようになる。
昭和 18年	1943	勤労学徒が動員され、農業用土管がつくられる。
昭和 19年	1944	呂号兵器の開発に伴い、耐酸性パイプが生産される。
昭和 21年	1946	「丸進事業」で土管の需要がおさる。
昭和 26年	1951	農地改良補助制度が復活し、土管の需要が高まり、最盛期を迎える。
昭和 29年	1954	東京都水道局で塩ビ管が採用され、土管の生産が減少する。
昭和 33年	1958	常滑で真空製管機の使用が開始される。
昭和 46年	1971	1 mの土管が開発される。
昭和 47年	1972	全国陶管工業組合が発足する。
昭和 59年	1984	土管、陶管の名称を「セラミックパイプ」に統一する。
昭和 60年	1985	日本下水道協会規格として下水道用陶製卵形管 <small>らんけいかん</small> が規格制定される。
平成 3年	1991	2 mの土管が開発される。
平成 7年	1995	阪神淡路大震災の影響をうけて、土管の需要が冷え込む。
平成 16年	2004	常滑の土管製造が終了する。



トラップ土管（大正～昭和時代初期）



水開管（大正～昭和時代初期）



呂号用コニカルフランジパイプ（昭和 20 年）



えだつき  
枝付土管（昭和時代）



たこう  
多孔土管（昭和時代）